

LUNWEN XIEZUO JIQIAO YU FANGFA

論文书寫技巧与方 法

论文写作技巧与方法

李晨

编著



西南交通大学出版社
<http://press.swjtu.edu.cn>

論文書き方技法

论文写作技巧与方法

李 晨 编著

西南交通大学出版社

· 成 都 ·

图书在版编目 (C I P) 数据

论文写作技巧与方法: 日文 / 李晨编著. —成都:
西南交通大学出版社, 2013.4
ISBN 978-7-5643-2279-3

I. ①论… II. ①李… III. ①日语—论文—写作—高
等学校—教材 IV. ①H365

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2013) 第 069515 号

論文書き方技法
论文写作技巧与方法
李 晨 编著

| | |
|-------|---|
| 责任编辑 | 祁素玲 |
| 特邀编辑 | 孙尚娴 鲜丽娜 |
| 封面设计 | 何东琳设计工作室 |
| 出版发行 | 西南交通大学出版社 (成都二环路北一段 111 号) |
| 发行部电话 | 028-87600564 028-87600533 |
| 邮政编码 | 610031 |
| 网 址 | http://press.swjtu.edu.cn |
| 印 刷 | 成都蓉军广告印务有限责任公司 |
| 成品尺寸 | 185 mm×260 mm |
| 印 张 | 13.25 |
| 字 数 | 396 千字 |
| 版 次 | 2013 年 4 月第 1 版 |
| 印 次 | 2013 年 4 月第 1 次 |
| 书 号 | ISBN 978-7-5643-2279-3 |
| 定 价 | 38.00 元 |

图书如有印装质量问题 本社负责退换
版权所有 盗版必究 举报电话: 028-87600562

まえがき

前書き

本書を編集する目的は「学位論文作成」授業の実践現場において中国の日本語学習者に卒業論文や修士論文の書き方を指導する際、「手元に一冊の『優秀論文作成術』『博士・修士卒業論文の書き方・考え方』などの専門書よりわかりやすい本があればどうなるか」という考えからです。本書は、大学生・大学院生の論文書き方実践指導講義をまとめて、小論文やレポートから、大学生のための卒業論文、院生のための修士論文の書き方まで平易明快に指南する書です。さらに、日本語で本書を完成するには、日本語の論文解読、日本語で学位論文を書くための論文用語やパターン様式に効率よくなじむことができると考えています。

ここの論文技法の専門書というのは研究者向けの専門の本のことではなくて、日本は日本にあるスタイル、欧米は欧米のようなスタイルの指導書が一般的なのです。もちろん研究手順や研究方法（演繹法・帰納法・比較研究法・文献分析法など）がほとんど変わらないですが、本書では、日本語で論文を書こうとする日本語学習者に論文らしい様式・構成・考え方をまとめて作り上げています。さらに、学位論文・学術論文はどのように進められているか、研究や学問に取り組む姿勢はどのように拵えるかを語りかけます。

- ・学術論文とはどういうものか
- ・研究テーマをどうやって決めるか。どう具体的にしばっていくか
- ・資料や文献はどうやって集めるか。どう分析解読するか
- ・論文の体裁はどんなものか
- ・論文の文章に必要なルールはなにか(表記法や文体、用語など)
- ・引用と自分の言葉とをどう書き分けるか

こういった心構えに関心がある人、あるいは逆にピンとこないという人、一度、手にとって読んでみて納得できる入門書でもあります。

ただし、論文を書くうえでより高度な知識、言わば、パラグラフ概念の理解、階層構造をもった文章の組み立て、ひとつひとつの文自体を書く技術、簡潔な文、明快な文を得るためには、この入門書とは別の本（『論文書き方マニュアル』など、本書の参考文献）を参照して読む必要があると思います。

本書は、主に文化と社会、言語と文学などの分野で、これから大学を卒業するに当たり、卒業論文を書こうとしている学生、大学院の修士課程を修了するために修士論文を書かなければならない院生を念頭に、論文の要件と作成の具体的な手順について述べた

ものです。技術的なことよりも、研究がどのようなプロセスを経てなされるのか、そしてその戦略・戦術をどのようにして練るべきなのかといったことを書いたものです。五章で構成されています。

第一章は論文の種類と構成，論文とレポート，学位論文と学術論文の違いを紹介します。

第二章は研究の進め方，卒業論文をはじめ，論文作成における資料の収集，文献検索などの方法を挙げています。

第三章は研究の方法，研究アプローチの選択，思考法，統計分析による言語研究，コーパスに基づく研究方法，など方法論の紹介です。

第四章はデータの統計方法，エクセルやSPSSによるデータ分析を解説します。

第五章は研究論文の範例，卒業論文，修士論文，博士論文のモデル論文を取り上げています。

また，具体的な研究方法として，質問表の具体的な作成方法やケース・スタディの特徴（プロセス・ケーススタディの種類・証拠の収集のやり方）についても述べられています。巻末には，さらに学びたい人のための形態素解析ウェブツール・書籍リストや索引などが「付録」に付けており，研究を始める人に今から使えるように並べて説明しています。

学位論文の作法は，研究者・指導者によって様々ですので，比較検討は必要ですが，その基本を学ぶには多くの学術論文を読むことが大切です。その際の通読（先行研究解読・文献解読）のポイントを学ぶことができますと思います。

本書は，論文を書くプロセスをまとめており，それにそって作業を進めていけば論文がかけるようになることを目標にしています。テーマの決定，資料の速読，先行研究・資料・自己の主張・問題設定，アウトライン作成，資料の整理，筋立て作業，目次・章・節といった論文執筆作業のプロセスに沿って展開しています。

本書は，学位論文から学術論文までの構成や方法を取り上げていますが，メインだったのは下記の3つの点にまとめています。

その一，「テーマとねらい」を明確にしておくことです。テーマの発見とねらいは，どのようなテーマを，なぜ取り上げ，それをめぐって何をどう考えていくのか，それを論文作成中に常に確認しながら練り直していくことです。

その二，論文を作成する際に，引用と要約を分けながら作成することです。特に引用よりも要約に力を入れたほうがよいです。

その三，説明・証明・主張，何・なぜ・どのように分類することです。論文の中で「説明」すべきことなのか，「証明」すべきことなのか，「主張」することなのかを考え，それを「何」「なぜ」「どのように」という軸で考えることなのです。

本書の編集には，範例論文をご提供いただいた諸先生方及び学生の皆様データの inputs を協力してくださった魯東大学日本語科の院生のみなさんに，心から感謝いたします。

李 晨

2013.3.10



目次

| | |
|-----------------------------------|----|
| 第1章 論文の種類と構成 | 1 |
| 1.1 論文の種類 | 1 |
| 1.1.1 研究論文 | 1 |
| 1.1.2 論文の定義 | 1 |
| 1.1.3 学位論文（卒業論文，修士論文，博士論文） | 2 |
| 1.1.4 学位論文を書くための心構え | 4 |
| 1.1.5 研究報告と学術論文（雑誌論文） | 4 |
| 1.1.6 論文とレポートの違い | 5 |
| 1.2 論文の構成 | 7 |
| 1.2.1 研究論文（学術論文）の構成とまとめ方 | 7 |
| 1.2.2 卒業論文の構成 | 11 |
| 1.2.3 レポートの構成 | 14 |
| 1.2.4 論文（レポート）作成の基本手順▽表示スタイル切り替え▽ | 15 |
| 1.2.5 論文テーマの整理 | 15 |
| 1.2.6 論文の主題の決定 | 17 |
| 1.2.7 論文（レポート）の執筆 | 18 |
| 1.2.8 論文の引用法と参考文献の並べ方 | 20 |
| 1.2.9 論文完成チェックポイント | 24 |
| 第2章 研究の進め方（卒論からスタート） | 26 |
| 2.1 文献の講読と収集 | 26 |
| 2.1.1 文献の必要性 | 27 |
| 2.1.2 文献の使い方 | 28 |
| 2.1.3 「芋づる式」の文献探し方 | 29 |
| 2.2 研究テーマの発見 | 30 |
| 2.2.1 テーマの深め方 | 30 |
| 2.2.2 問いのたて方 | 31 |
| 2.2.3 先行研究の読み方 | 32 |
| 2.3 研究方法の選び方 | 34 |
| 2.3.1 パイロットスタディ（探索研究） | 35 |
| 2.3.2 卒論の研究計画書（選題報告） | 35 |



| | | |
|------------|---------------------------------|-----------|
| 2.4 | 序論・本論の書き方 | 36 |
| 2.4.1 | 序論の書き方 | 36 |
| 2.4.2 | 本論の展開 | 37 |
| 2.5 | 研究調査 | 38 |
| 2.5.1 | 研究調査のしかた | 38 |
| 2.5.2 | 研究調査の手続き | 38 |
| 2.6 | ワード・エクセルにおけるグラフ作り方 (Office2007) | 39 |
| 2.6.1 | ワードグラフの作成手順 | 39 |
| 2.6.2 | エクセルグラフの作成手順 | 41 |
| 2.6.3 | 図表をつくるときの留意点 | 49 |
| 2.7 | 考察と結論の書き方 | 50 |
| 2.7.1 | 考察の書き方 | 50 |
| 2.7.2 | 結論の書き方 | 51 |
| 2.8 | 題目・要約・謝辞・付録のつけ方 | 51 |
| 2.8.1 | 論文題目のつけ方 | 51 |
| 2.8.2 | 要約の書き方 | 52 |
| 2.8.3 | 謝辞・付録のつけ方 | 52 |
| 2.9 | 卒論の点検と推敲 | 53 |
| 第3章 | 研究の方法 | 54 |
| 3.1 | 研究アプローチの選択 | 54 |
| 3.1.1 | 科学と研究の分類 | 54 |
| 3.1.2 | 研究のタイプ別のアプローチ | 55 |
| 3.2 | 思考法—演繹法と帰納法 | 56 |
| 3.2.1 | 演繹法 | 56 |
| 3.2.2 | 帰納法 | 57 |
| 3.2.3 | 演繹と帰納との比較 | 57 |
| 3.2.4 | 演繹法・帰納の欠点 | 58 |
| 3.2.5 | 誤謬の原因の排除 | 59 |
| 3.3 | 統計分析による言語研究 | 60 |
| 3.3.1 | 言語資料の収集とデータ化 | 60 |
| 3.3.2 | 量的変数と質的変数 | 63 |
| 3.3.3 | 言語研究のデータの特徴 | 64 |
| 3.3.4 | 記述統計学・推測統計学の基本方法 | 65 |
| 3.3.5 | 仮説検定 | 66 |
| 3.3.6 | その他の仮説検定 | 68 |
| 3.4 | コーパスに基づく言語研究 | 69 |
| 3.4.1 | コーパス調査 | 71 |

| | |
|--|------------|
| 3.4.2 コーパス分析の手順 | 72 |
| 第4章 データの統計方法 | 85 |
| 4.1 エクセルによるデータ分析 | 85 |
| 4.1.1 Excel2007 ピボットテーブルを使ったクロス集計 | 85 |
| 4.1.2 エクセルを使ったデータの分析 | 107 |
| 4.2 SPSSによるデータ分析 | 119 |
| 4.2.1 SPSS とは | 119 |
| 4.2.2 SPSS のデータファイル | 119 |
| 4.2.3 SPSS による分析の手順 | 130 |
| 4.2.4 SPSS での実行方法 | 133 |
| 第5章 研究論文の範例 | 137 |
| 5.1 レポート（小論文） | 137 |
| 5.2 学位論文 | 140 |
| 5.2.1 卒業論文 | 140 |
| 5.2.2 修士論文 | 140 |
| 5.2.3 博士論文 | 140 |
| 5.3 研究論文 | 141 |
| 5.3.1 コーパス分析の研究例「語形の定量的調査」※（李在鎬） | 141 |
| 5.3.2 心理実験・調査による研究例「概念理解時における上下 のイメージ・スキーマ利用の検討」※（中本敬子） | 150 |
| 5.4 統計学による研究例 | 157 |
| 5.4.1 夏目漱石の3作品における思考動詞の頻度変化※（仮説検定） | 157 |
| 5.4.2 作文中の高頻度名詞に見る立論のパターン※（クラスター分析） | 160 |
| 5.5 研究タイプによる質問紙調査の質問項目作成※（田名場 忍） | 162 |
| 5.5.1 質問紙調査とは | 162 |
| 5.5.2 質問紙調査におけるさまざまな質問項目 | 163 |
| 5.5.3 いくつかの研究タイプと質問項目について | 165 |
| 5.5.4 質問紙調査の種類 | 167 |
| 付 録 | 169 |
| 付録1 学位論文範例 | 169 |
| 付録2 日本語研究のためのコーパスと分析ソフトウェア（2012年の時点） | 183 |
| 付録3 OFFICE 用語中日対照表 | 189 |
| 参考文献 | 200 |



第1章 論文の種類と構成

1.1 論文の種類

1.1.1 研究論文

原著論文とは、基本的に1論文につき1テーマ(1トピック, 1つの問題)について書かれているものである。雑誌や学会誌に載る論文のほとんどがこれである。

調査論文(レビュー論文・サーベイ論文・学位論文)は、あるトピックに関する原著論文を調査してある視点からまとめた論文である。この種類の論文は、他人の研究成果をまとめたものであるため、新しい事実や成果は含まれない。ただし、その研究分野の概略や現状を知るのにとっても有用である。

小論文というのは、短めの論文ということである。小論文とは、きちんとした構成(序論・本論・結論など)を意識したレポートの記述は小論文の練習になる。小論文の試験で、大学側は学生の考えや知識、思考力の採点と同時に「自分の意見を的確に相手に伝える能力」が分かるのである。

大学入試や入社試験で求められて試験場で限られた時間内で客観性のある事実や理論に基づく文章をかくのである。書き手の思考力を試すための理路整然とした論理的な文章である。それは、求められている題目はほとんどの場合、「高校生活で得たもの」「記憶に残る本」「21世紀の日本」といった題の「ものの考え方」や「人生観」や「適正」を問う感想文か作文である。

1.1.2 論文の定義

広辞苑(第6版):①論議する文。理義を論じきわめる文。論策を記した文。②研究の業績や結果を書き記した文。「卒業一」「学位一」。

学研新世紀ビジュアル百科事典:①ある物事について筋道を立てて自分の意見を述べた文章。thesis;essay。②学問上の研究の結果を書きしるした文章。Dissertation。

学研パーソナル現代国語辞典:①筋道を立てて自分の意見を述べた文章。②研究の結果をまとめた文章。

リーダーズ英和辞典(第2版):①article,②discourse,③discussion,④dissertation(a doctoral dissertation 博士論文),⑤literature,⑥miscellany,⑦paper,⑧thesis(a master's thesis 修士論文),⑨tract²,⑩tractate,⑪treatise。

論文とは、ある問題についての、自分の主張をなんらかの調査に基づいて、合理的な仕



方で根拠づけようとする、一定の長さの文の集まりである。(小林康夫・船曳建夫, 1994)

私の定義だと、教育のプロセスの成果を表したものがレポートであり、その上、社会の中に新しい知見を加えたものが論文である。論文では舞台裏は書く必要は全くない。知見を論理的に説明することだけでいい。レポートは教育のプロセスを全部書くとしたら舞台裏を全部書くというものである。(伊丹敬之, 2001)

論文とは、「何かを論じる文章」のことである。「論じる」とはダラダラ書くことではない。茶飲み話やおしゃべりを文章にしても、論文にはならない。特定の形式に従って叙述することである。その形式を守らなければ論文にはならない。論文を構成するものはたくさんあるが、①問題意識、②問題設定、③論証・分析、④結論。(山内志朗, 2001)

良い論文とは「？」で始まり、「！」で終わる論文である。(鹿島茂, 2002)

すなわち、「論文」には「問い」から始まり、「なぜ……なのか」「……とは一体なにか」「どうしてAがBより優れているか」「……すべきか否か」「いかに……すべきか」など、「？」から始まる。それから「問い」に対して自分なりに調査し、考察した結果、これが唯一絶対とは断言できないまでも、少なくとも一つの「答え」なりうるとは言い切れる。これが自分の主張だ！の「！」で終わる。ただし、「論文」には「問い」と「答え」だけでは「論文」としてまだ不十分である。「？」に対する「！」を主張するに足るだけの証拠立て、つまり「論証」が必要不可欠なのである。わかりやすくすれば三つの練習問題を挙げてレポートと論文の難易度を説明しよう。

①マイケル・トマセロ『心とことばの起源を探る』の第四章「言語的コミュニケーションと記号的表示」を読んで要約せよ。

②なぜ漢字文化が日本で花開いたか？歴史的・文字文化的背景を考察しつつ論じせよ。

③漢字文化圏の文化について何でもいいので自由に論じせよ。

①の問題は読んで要約するだけでいいので、「レポート」を求めているものである。

②と③の問題は設問が入っているので「レポート」ではなく、「論文」になる。②は「？」があらかじめ決められているので、③よりは楽になるようだが、「問い」と「答え」を補佐する証拠や「自分なりの主張」をサポートする資料を集めなければならないので、「卒業論文」という形になる。

1.1.3 学位論文（卒業論文、修士論文、博士論文）

学位論文とは、自分の研究成果に対するレビュー論文である。卒業論文・修士論文というのは、一つの問題についてまとめているので、ページ数に制限のない原著論文のイメージになるが、本来はレビュー論文である。修士論文を執筆するまでに複数編の原著論文があるならば、それをある観点からうまくまとめて編集するものである。特に博士論文は、自分の研究成果に対するレビュー論文の観点が強い。多くの博士課程では、修了要件として（狭い意味での、すなわち学術雑誌掲載の）原著論文数編が求められるので、博士論文は単独の成果ではなく、複数の成果を合わせたレビューになる。



1. 卒業論文

卒業論文（卒論）とは、最終学年に一年間にわたって研究を行い、その結果を報告する論文を言う。あるいは、研究のプロセスを重視して、卒業研究と言うこともある。

卒論とは、専門の学びをとおして「問い」を立ててみずからに研究して、その「答え」を自分で見つけることなのである。研究とは、未知である問いを解決しようとする事である。これに対して、レポートは勉強である。勉強とは、すでに誰かが知っていることを学ぶことで、勉強は研究のためにも必要だが、勉強だけでは研究はできない。（白井利明, 高橋一郎, 2008）

すなわち、卒論は学問を実践する場である。学問とは、基礎から積み重ねられた体系的な知識のことである。常識や経験に基づく判断とは違う。すなわち、常識や経験は、ものの見え方や思いこみによって支配されがちである。

レポートは数か月から数週間という短い期間で書き上げるのに対して、卒論は、1年という長い時間を費やすものである。問いを立てて解決するという事自体は膨大な作業と時間を必要とするからである。

卒論は最終学年に行う。大学4年間の学びの集大成が卒論なのである。卒論は卒業の一環として各国の大学に採取される認定法なのだ。そして、卒論という1冊の本を自分で書く機会は、多くの人にとっては一生に1度の機会のものである。

卒論は社会的にも注目されている。就職試験でも進学試験でも「卒論はどんなことをしていますか」と質問されることがあるのである。

2. 修士論文と博士論文

修士論文と博士論文、一橋大学大学院経済学研究科教授の山重慎二の経験談によれば、修士論文について、次のような定型化されたステップが考えられる。①自分が面白いと思う論文（出来るだけ最近のもの）を3本選ぶ。②それぞれの論文を、何度も何度も読んで、ほぼ完全と言えるくらいまで理解する。③納得できるまで読み込んだら、それらの論文で参照されている論文の中で、読んでみたいと思わせてくれるものを順次読んでいく。この3つのステップを続けて、10本くらいの論文が「自分のもの」になったら、「修士号」という資格に値する修士論文は書けると思う。10本くらいの論文の内容を整理するような修士論文の構成（章立て）を考えて、それぞれの章を十分な説得力があるようなものにするために、今度は、かなり貪欲に論文を読んで、既存の研究の全体像を理解し、その上で、自分の意見やモデルが提示出来れば、修士論文としては十分だと思われる。

博士論文について、修士論文とは異なり、自分のオリジナル貢献が必須となるので、到達目標が高くなるが、上記のステップは基本的には同じだと思う。違うのは、既存の研究の全体像について理解すると同時に、1つでもいいから、そこにはない新しい結果を提示出来るようにならなければならないということである。



1.1.4 学位論文を書くための心構え

まず私自身は、現在、修士論文にせよ、博士論文にせよ、短期間に完成させることが期待されているものであるという点に注目するならば、それらはあくまでも学位という資格を獲得するための論文であると割り切って考えた方がいいと思う。つまり、それらは「自分の考えを体系的にまとめて世に問う」といった論文である必要はなく、「私は(修士あるいは博士という)学位に値する能力を持っている」ということを示す論文であればよいということである。このような心構えの違いにこだわるのは、それが論文を書くための勉強の仕方について考える時、とても重要だと思うからである。もちろん、ある問題について強い関心を持ち、その問題について大学院時代に深く掘り下げて勉強したいという希望をもち、そのような研究が順調に進むならば、あまり問題とはならないと思うが、そのような恵まれた状況にない可能性も高いと思う。

そのような時の私のアドバイスは、体系的な論文を書くためのテーマ探しに時間をかけるのではなく、自分が面白いと思った問題で、自分でも取り組めそうだと思う問題について、(指導教師と相談しながら) どんどん取り組んでいくようにした方がいいよというものである。そして、十分に深く取り組んだ問題が増えていけば、それらを束ねることで論文ができるはずである。(いずれの問題も、自分が面白いと感じた時点で、ある種の共通項を持っていることが多く、それらを束ねるタイトルは比較的簡単に見つかるものである。)(山重慎二, 2012)

1.1.5 研究報告と学術論文(雑誌論文)

研究報告とは、学術的な研究の成果をまとめたもののことである。研究報告は、研究の方法(調査、実験、観察など)や研究の結果、それらの分析や考察を記述するだけでなく、独自の結論(新しい事実の発見、新たな理論の構築、既存の学説や理論の修正など)を得ることを目指すものである。

なお、学術論文や学位論文も独自の結論を得ることを目指している点は研究報告と同じである。一般には、詳細な情報を加えるなどして図 1.1 の示されるように研究報告を発展させたものが学術論文であり、学術論文を集めてまとめたものが学位論文だといえる。

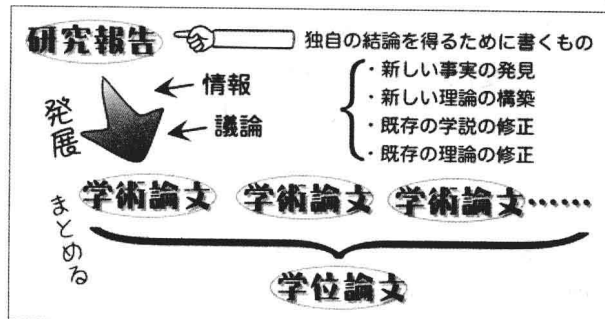


図 1.1



1.1.6 論文とレポートの違い

1. 論文とレポートの内容

レポートは、高校では、文章の種類を「レポート」「論文」「感想文」「文学的な文章」「実用的な文章」「日記」などに分けている。一般に「レポート」は次のように定義される。

- ①調査・研究・実験などの報告書。
- ②学生が提出する研究結果をまとめた小論文。
- ③新聞・雑誌などの報告記事。

大学生に関係あるのは②であり、①はほぼ「卒業論文」に相当すると考えてよい。ここでは②をレポートの定義としてその特徴をまとめると次のようになる。

「論文」は、学術論文、論説文、就職試験や入試における小論文を含む。「小論文」と「感想文」をまとめて、作文と呼んでいる。米国の大学でもっとも使われている論文マニュアルである A Manual for Writers of Term Papers, Theses, and Dissertations は、いわゆるレポート (term papers), 卒業論文・修士論文 (thesis)・博士論文 (dissertations) をまとめて「ペーパー」と称する。欧米では、学会などで発表する論文も「ペーパー」と呼ぶ。(吉田健正, 2004)

学術業界における両者 (レポートと論文) の使い方の差は、「論文」とは広い意味での「レポート」の一環である。(泉忠司, 2009)

広辞苑 (第6版): ①報告。報道。②報告書。学術研究報告書。「一用紙」。

リーダーズ英和辞典 (第2版): レポート (report・paper), 1a 《調査・研究の》報告(書) <on>; 公報; 《新聞などの》報道, 記事; 通知表; 《裁判所などの》審査報告書; 《俗》SUGAR REPORT. ・make a report 報告する。

学研パーソナル現代国語辞典): 調査・研究などの論文・報告書・報告記事。リポート。

学研新世紀ビジュアル百科事典: レポート (リポート), ①研究・調査などの報告書。②学生が提出する研究結果の小論文。③新聞・雑誌などの報告記事。レポート。

学研ニューワイド学習百科事典: レポート (リポート), 研究したことや調べたことをまとめた報告書。リポート。おもに中学校の国語科で、書き方の基本が指導される。①理学的・自然科学的な内容について、実際に観察したり実験したりしたことをまとめる。②社会科学・人文科学的な内容について、アンケートなどによる調査や、参考書・書物などを読み、比較してまとめる。◇課題の選び方, 題名の決め方, 下書きをすること, 文章の組み立て(動機→目的→方法(経過)→まとめ(結果)の順序で書く), 反省と感想・今後の計画など, 事実をそのまま正しく書くことがポイントになる。

以上でまとめて見ると、論文とレポートについてはいくつの観点か認識があるが、論文とレポートには明確な違いはないと考えられる者は多い。

レポートの特質の一つには、積極的に他の文献を引用して自分の意見を説得力のある強固なものにすることが挙げられる。自分の思想をまとめ上げて他人に理解しやすい形



で提供するという営み自体は、レポートも論文も変わらない。

レポートは「報告 (report)」の名の通り、事実を伝達するという点に重きが置かれているのに対し、論文は事実をもとに自分の主張を表現するところに重点があるという違いはあると言われる。

しかし、レポートであっても自分の主張が盛り込まれていることがほとんどであるし、論文でも事実の伝達は重要事項であるので、結局のところ、論文とレポートには明確な違いはないと言えるが、単なる事実の報告 (観測結果) がレポート、それを基に自分なりの見解 (そこからどういうことが読み取れ、それはどういうことに発展していくかなどの新事実の指摘や問題提起を含むもの) が論文である。

あえていえば、「レポート」と「論文」は「内容構成」より「難易度と深度」に区分すればどうだろうと考えている。

さらに、「レポート」と「論文」は内容構成と難易度と枚数から進めると、「レポート」は「学習レポート」、「調査レポート」、「研究レポート」、「リサーチ」のように枚数増になり、「論文」は「研究論文」、「研究報告」、「学位論文 (卒業論文・修士論文・博士論文)」の順に枚数が増える。

レポートとは、表 1.1 に示されるように、出された課題をこなすためのものである。実際に作業をすることで、学習内容を定着させたり、自分なりの意見をもつことを意図されている。それに対して、卒論は、自分で「問い」を立て、自分で解いていく、ということが求められる。卒論では研究のプロセスを重視することである。(白井利明, 高橋一郎, 2008)

表 1.1 論文・レポート・作文 (感想文) の違い

| 項目 | 論文 (卒論) | レポート | 作文・感想文・小論文 |
|----------|--------------|--------------|-----------------------|
| 課題 | 自分で問いを立てる | 教員が出題する | 個人の体験談 |
| 主張 | 普遍的な事実に基づく主張 | 勉強してわかったもの | 個人的な体験に基づく主張 |
| 展開 | 序論, 本論, 結論 | 研究して問いを答えるもの | 起承転結 |
| 準備期間・字数 | 半年以上・多い | 数か月・少ない | 数週間・少ない |
| 作業 | 指導教員とも共同作業 | 自分ひとりで作業 | 自分の感じたこと, 思ったことを書けばよい |
| 提出後にすること | 発表や面接試験 | 特になし | 特になし |

2. 論文・レポートの長さ

論文や小論文の長さに明確な基準があるわけではないが、一般的に考えられる標準的な長さの目安を示せば次のようになる。



学術論文（雑誌論文），A4 サイズ 10～20 ページ（10000～20000 字）。

学位論文（卒業論文，修士論文，博士論文），A4 サイズ 10～200 ページ（10000～200000 字）。

レポート（小論文），A4 サイズ 1～5 ページ（1000～5000 字）。

1.2 論文の構成

論文の基本構造は「序論」「本論」「結論」の三つの部分からなるのが普通である。論文本体は、「問題を示す」→「証拠を示す」→「答えを示す」という順番で書く。

◎序 論

「序論」は論文全体の紹介である。この論文・レポートが「何を意図しているか」「どのような問題意識を持っているか」「どのような結論に結ぶか」「どのように議論していくか」ということを簡単に紹介する。ここを読めば、筆者が何を考えて、何をこの論文・レポートで主張しているのかがつかめるようにしておく。

「序論」に結論を書いても良い。序論で結論を明らかにしておく。すなわち、「私の結論はこれである。こうした方法論を用いてこうした結論に至った」というようなことを、「序論」に書く。読み手は、結論を念頭に置き、書いた人の議論を追いながら検証していくことができる。

◎本 論

「本論」は、自分の主張したいことに沿った証拠を積み上げていく部分である。次から次へと証拠を繰り出し、自分の議論を進めて行く。ここで使われるのは自分で調べた資料や、調査結果、実験結果や二次資料（参考文献など）である。

本論の途中に余計な情報は入れない。引き締まった論文は、主張に沿った証拠を次々に繰り出す。論文のテーマに関するものを書くのではなく、「論文の主張に沿ったもの」を書いていくのである。

◎結 論

「結論」は言わば裁判の判決部分のようなものである。「本論」で有罪（あるいは無罪）の証拠を積み上げ、読み手が納得できる形で判決、つまりは書き手の結論を述べる。とは言っても単なる結論の宣告ではなく、「本論」で議論されたことを要約して、「であるからこう考える」のように導き出す。

1.2.1 研究論文(学術論文)の構成とまとめ方

卒論（卒業論文）、修論（修士論文）に限らず、研究論文（学術論文）を構成するパ



ートには、「目的」、「対象」、「方法」、「結果」、「考察」、「結語」という6つの基本形がある。ただし、実際の論文では各パートの区切り方（章立て）は次のように多種多様である。

「目的」には、研究目的・課題・はじめに・緒言<問題意識・先行研究・仮説><課題と方法>を含んでいるもの。

「対象」には、調査対象・データ（方法）を含む。

「方法」には、分析方法・接近方法・分析の枠組み・手続きなどを指す。

「結果」には、調査結果・分析結果を含む。

「考察」には、総合考察（結果および考察）のこと。

「結語」には、結び・おわりに・摘要・総括などを指す。

パートの分け方や名称の許容幅は広いものの、まとめ方のポイントはほとんど変わらない。なお、論文の構成についての要点には、これを読んだだけで論理的な筋立てをもった論文がかけられるようになるわけではない。材料（データ）があっても、論文の構成についての形式的な知識だけでは、論文をまとめるのは容易ではない。実際の論文（それも優れた論文）を注意深く読み込んだ経験こそが、論文をまとめるための近道になる。

1. 「目的」のまとめ方

1) 問題意識を論じる

・冒頭に、研究上の問題（課題）の背景として、実際の社会の動向や現実の問題への関心・態度を示す。ただし、意見の詳述は控える。純粋な自然科学の論文にはこの部分はないが、研究の意図や現実社会への関わり方を他者が理解するうえで、研究の背景の記述は意味をもっており、書かれていないと読み手にとって問題意識がわかりにくくなる。現実の問題は研究の出発点であるが、それ自体は研究上の問題ではない。

・論文執筆にいたる個人的動機や興味を持つに至った経緯の記述は不要である。

・問題意識の問題とは既存研究の一連の成果を振り返ってみての研究上の問題である。問題とはあるべき姿と現状の姿とのギャップで、改善すべき事態を意味するのである。

・関心を持っている現実の問題に深い関わりのある先行研究の系列を整理・紹介してから、先行研究の到達点を確認する。

・研究のあるべき姿からみて先行研究の問題点（限界、欠漏）を指摘し、論点を明らかに示す。論点の着目点は、事実認識の当否、視点の置き方、理論の適用の仕方、研究対象の範囲、証拠の充実程度、方法・手法の妥当性、観測対象の選択等である。

・論点開示では不当な論難、誹謗中傷はいけない。課題化しない論点も要らない。

・実践で解決すべき現実の問題と、解明すべき研究上の問題とは峻別すべきである。

2) 研究課題を設定する

つぎに、研究上の問題意識を受けて研究課題（明らかにすべき問題）を設定する。

・論点に自ら指摘した先行研究の問題点を克服できるように課題を設定する。

・叙述の仕方は様々でも、通常、研究課題は仮説の検証を目指す形態を取る。



- ・課題は限定しておく。絞り込む。課題が狭くなっても一論文一課題にする。
- ・課題設定は当該分野の研究の発展・深化への積極的な提案になるものである。

3) 留意すべきこと

- ・「結果」や「考察」とのリンクを忘れてはならない。結論の伏線を張るのはよいが、ここで早まって結論を下さない。「目的」は「結果」や「考察」を書いてから、あらためて整合するように書き直す方がまとめやすい。
- ・「目的」を「課題」より上位に置く例もあるがここでは両者を区別していない。
- ・論文で想定する読者は新聞等と違って一般の読者でなくて、当該分野の研究者である。研究者への情報発信として纏めること。

2. 「対象」および「方法」のまとめ方

1) 「対象」のまとめ方

- ・研究の材料・素材（事例）の情報を整理・要約する。ここでの「対象」とは観測対象で研究対象の1要素である。研究対象は課題で設定する。
- ・「対象」が短いときは「方法」と一括りでもよい（自然科学ではよくある）。社会科学では調査対象の情報が多いため独立のパートとなるケースが多い。

2) 「方法」のまとめ方

- ・研究の手続きをかくさないで明らかにする。分析で用いる重要な概念・指標や調査方法・分析手法の提示をおこなう。
- ・他者が追試できるように、手続きの客観性の保証のため再現できるように書く。ただし、要点を述べ、くどくどと書かないほうが良い。
- ・フレームワークやモデル、類型化については、独立したパートにする。
- ・簡潔に記述できるときは「課題と方法」のように一緒にしてもよい。

3. 「結果」のまとめ方

1) 調査した事実、計算結果はありのままに書く

- ・結果は客観的に徹する。都合の悪い結果をかくさないこと。事実を曲げないこと。

2) できるかぎり簡潔にまとめる

- ・議論の筋立てに沿って叙述する。知っていることをすべて書くわけではない。

3) 「結果」（事実やデータ、データの加工・変換）とその解釈を混同しない

- ・「結果」（調査結果や分析結果）は本来、解釈を挿む場所ではない。研究成果たる“結論”は解釈を要する（主観が入る）ので「考察」以降にまわす。
- ・「結果及び考察」もあり得るが、できる限り分離した方がよい。

4) 図表は研究成果を含むものに限定すること

- ・むやみに図表をふやさない。参考情報は図表化する必要はない。